

「世屋」地域と「藤布」生産

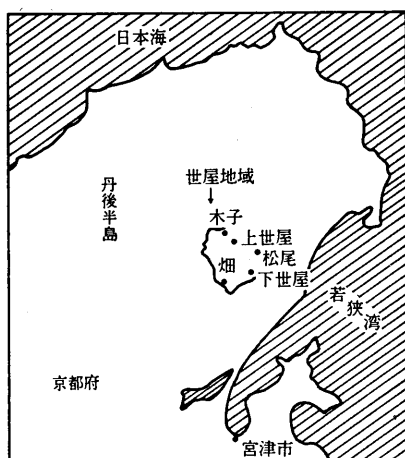
高見義和

序論

世屋地域は、京都府北部の丹後半島東南部にあたる世屋高原周辺に展開する五集落（木子・上世屋・松尾・下世屋・畑）からなり、宮津市中心部から北へ二十五kmの所に位置する。

この世屋地域は、現在深刻な過疎現象に直面し、昭和三十九年には地域内の東野集落が、昭和四十七年には地域内の駒倉集落が廃村になって、なくなった。また五十歳以上の占める割合が全体の六十二%にも及び、典型的な高齢村落ともいえるだろうと考えられる。

そこで、現在、大きな社会問題となっている農村における「過疎」の実態と崩壊しつつある世屋地域の展望を、上世屋集落を中心にして、その生活環境の変化と伝統産業の没落お



〔図 I〕 世屋地域周辺

よび住民意識の問題などに視点を置いて、調査と考察を実施したものである。

第一章 上世屋地域の生活

上世屋地域は、二十一世帯四十九人の住民が生活し、三十歳代までの人口はわずか五人であり、平均年齢は、五十五歳以上にも及んでいる。そして、生活基盤の中心は農業であり、山間部に開かれた狭少な平坦部に、水田三十一町歩、畑地八町歩余の耕地によって生計を立てている。

かつては、自給自足を基礎として農業をするかたわら、木子での「炭焼き」、上世屋での「藤織り」、畑での「紙すき」などを例とする冬期の副業を現金収入の道として生活していたが、戦後の高度経済成長によって、資本主義経済が急激に発展したため、農業経営収益の低下、家計費の高騰をきっかけに、日本の農業従事者たちは、兼業化と離農を余儀なくされ、農業生産は全国的に停滞している中で、上世屋地域でも同様の傾向を示している（表Ⅰ参照）。そして、現在では第二種兼業農家が主となり、杉や松の伐採と植林などの、営林署の山林労働作業員に従事する人が殖え、また、営林署勤めの夫を持つ婦人たちは、西陣帯の手機内職に従事して生活している。

このように、農業所得だけでは希望の生活水準を支えることができなくなってきた。そして、農業技術や農業経営の形態

（単位：戸）

表Ⅰ 農業実態資料

事項 地区	総農家数	専業農家数	兼業農家数	第一種	第二種
木子	5	4	1	1	9
上世屋	16	6	10	0	10
松尾	5	0	5	3	2
下世屋	26	5	21	3	18
畑	17	3	14	2	12
計	69	18	51	9	42

が変化している中で、主体となつて対応していくはずの青年層が極めて少なく、その上、高齢者たちは伝統的な意識が抜けきれず、農業経営などは、やはり慣行的農法にたよっている。その結果、このような変化にうまく対応できない層の人々が、離農・離村に踏みきったのであろうと考えられる。そして兼業化が進むにつれて、自分の家の山の世話ができない、田畑の仕事を古老達にまかせなければならぬ、などの問題も生じた。こうして、上世屋の人々は、深刻な過疎化に苦悩しながらも、家族全員が手一杯の仕事を受け持つて、生活しているのが実情である。

次に、地域生活に密接に関連する自然環境も、過疎化の原

因の一つとして考える。この地域の地形は、起伏に富み、合わせて冬の積雪量も二米をこすことがあり、「雪ぐれの里」と異名をとるほどである。すなわち、生活を行なう上で、たいへん厳しい現実がある。また、防火体制の不十分から、明治四十一年と昭和十九年に大火を起こし、ほとんど村中が全焼の状態で陥り、昭和三十八年の記録的な豪雪と合わせて、過疎化を急激に押し進めたのである。さらに、医療施設などの公共施設等の不足が、一層この地域を住みにくくしている原因として考えられる。

このように、この地域では、全国的な農業生産の停滞、高度な生活水準に伴う主産業の没落、悪い自然環境、様々な施設不足によって、生活環境は増々悪化し、離村と廃村の危機に今、まさに直面していると私は考える。

第二章 藤布生産

かつて世屋地域では、地形や自然条件を有効に生かして、各集落独特な副業が営まれていた。その代表的なものに、上世屋の「藤布織り」、木子の「炭焼き」、畑の「紙すき」などがある。これらの副業は、現在、ほとんど消滅してしまった。その中で、藤布織りも、年々衰退しているのだが、一人

の老婆によって織りつづけられている。

「藤布」とは、樹皮繊維の一つであるマメ科に属する「藤づる」を、利用した織り物である。上世屋は、標高五百mの山間部であったため、綿の栽培が不可能であり、また原料である「藤づる」が近くに自生し、確保が容易であった、などの背景の中で、盛んに生産された。そこで、この藤布織りという伝統産業が、地域生活に、また、地域の過疎化に、どのような関連を持っているのかを次に述べてみたいと考える。

かつて藤布は、上世屋住民の生活必需品として、かかすことのできないものであった。例えば、「仕事着」・「畳の縁」・「米袋」など、日用品として利用された。また、上世屋の老婆は、口をそろえて、「……藤布が織れんと嫁にいかれんじゃった。女のお天職じゃったでな……」といっているように、藤布織りは嫁入りするための、資格にまでになっていた。

しかし、時代が移り変わるにつれて、この藤布の利用価値が変化してきた。資本主義の発展によって、工場で大量生産される綿製品や化学繊維が普及すると、必需品であったはずの藤布は、衰退の一途をたどっていった。

この藤布は、水はけがすぐれている、熱に強い、など樹皮繊維独特の長所を持っているが、手間がかかり、手作りなため、大量生産が不可能であるなど、普及させるには致命的な

欠点を合わせてもっている。一方、綿製品などは、機械化が進むにつれて大量生産が可能となり、安価なうえ、手軽に手に入るようになり、上世屋住民にとっても、綿製品をかかすことができなくなってきた。このように、藤布は、現代の生活上、不必要なものとなり、その上、後継者が望めない現実もあり、現在では、必需品から民芸品的なものへと、変貌をとげたのである。

次に、木子の「炭焼き」や畑の「紙すき」などの伝統産業は、現在、消滅してしまつたが、なぜ上世屋の藤布織りが残存したのか、ということを考察したいと考える。まず考えられることは、唯一に織りつづけている老婆の家庭事情が、上げられる。この老婆の家庭は、子供たちは京都や大阪に住み、Uターンは望めず、夫と二人暮らしである。その夫は、現在寝たきりであるため、農業に従事することは不可能である。それゆえ、生きてゆくためには、藤布を織るしかなかった事情があった。また、現在、上世屋で普及している西陣帯の手機内職とも、密接に関連していると考えられる。綿製品の普及に伴い、藤布生産が衰退している中で、この藤布に見切りをつける人が殖えた。それが西陣帯であり、かつては、丹後ちりめんも行われた。そうして、上世屋内に、西陣を織る区域と丹後ちりめんを織る区域、さらに藤布を織る区域という

よに、地域区分が形成されていった。そして、区域的派閥が生まれ、その関係上、この老婆は、西陣帯の手機内職に従事しなかったのではないかと考えられる。また、西陣の収入が振込み支払いによる収入であるのに対して、藤布は、現金受け渡しであつたことも、この老婆には都合がよかったのだと思われる。

これらの理由から、この藤布は、現在でも、一人の老婆によつて細々と生産され、京都の間屋に出荷され、茶室の座ぶとんとして利用されるだけのものとなつた。また、明治・大正時代には、年間三百〜四百反もの生産高を上げていたのに対して、現在では、十反足らずの生産高になつてしまつた。それと同時に、明治時代には三百人の住民が生活していたのに対して、現在では、四十九人にまで減少してしまつた。

このように、藤布生産という伝統産業は、かつては地域生活を送る上で重要であつたが、現在では、地域の過疎化に密接に関連して、減少している。そして、上世屋が、廃村にいたることが目に見えているのと同様に、この藤布生産という伝統産業は、消滅すると私は考える。

しかし、藤布織が国の「記録保存等を講ずべき無形民俗文化財」に選択されるなどの、明るい灯もある。また、地方行政と地域住民が一体となつて、一般に公開して、体験教室を

利用して、藤布織りを実践して、見直してもらおうとする動きも存在している。また、この藤布織りは、人間の英知のすばらしさの証拠として、記述などの方法で、子孫に残存させることは、当然、必要であると私は考える。

第三章 復興計画と住民意識

世屋地域では、過疎現象が深刻化している中で、ただ放置しておいたわけではなく、その過疎化に歯止めをかけようと、住民と行政側が一致協力して、過疎化対策を講じてきた。

まず、道路網を整備する必要から、丹後縦貫林道を建設した。この縦貫林道は、半島中央部を縦断することにより、幹線としての役割をはたし、支線となる葉脈林道、未改修府道、町村道などの開発改良とあわせて、丹後半島全域の開発発展をはかり、地域生活の向上を促進させることを目標としている。さらに、林業経営意欲の増進、開発工事による現金収入の増加、生活基盤の確立により、孤独感の解消と生業に対する意欲の増進などの効果を見込み、過疎化という厳しい現実に対処しようとしたのである。しかし、地元住民の対応は、「効果はあまりでてこなかった。中心的なものに乏しく、決め手がなかった。」など、落胆的な受けとめ方を持っていた。

そして実際に、過疎化現象が解消され、住民生活が大いに向上したわけではなかった。

このような状態に危機感を抱いた地域住民は、昭和五十二年に世屋地区振興委員会を発足し、昭和五十三年から実施した府の地域農政特別対策事業とからめ、「村おこし」につ

いて検討を重ねた。

そして、昭和五十六年度農村地域農業構造改善事業の取組を決定した。

表Ⅱ 施設一覧

施設	事項	年 度	施設の概要
遊歩道		56年	1ヶ所 1,053m
農林漁業 体験実習館		57～58年	1 棟 936㎡
体験教室		59年	2 棟 220㎡
野外 緑地広場		60年	1ヶ所 4,320㎡
府営 「家族旅行村」		57～59年	91ha
団体は場整備 事業(継続中)		55年～	16.8ha

表Ⅱは、このような取組を背景にして、この世屋地域を観光村的に復活させようとして、設置された施設の

一覧である。

これらの施設を利用して、様々な企画、運営が実施されている。たとえば、体験農園や体験牧場において、体験実習を実践したり、そこで収穫された産物等を体験実習館に供給して観光客に試食してもらうというシステムをとっている。ま

た、体験教室においては、(藤布織り・紙すき・竹細工・そば加工)などを実際に体験してもらい、伝統産業の見直しに尽力をつくしている。これらは、体験実習館を中枢施設として各々関連をはかりながら、地域の発展、伝統産業の見直し、生業に対する意欲の回復、孤独感の解消などを目的として運営されている。

このように、世屋地域では、発展計画による施設の建設、道路網の整備等によって、多少の希望が生まれてきたわけであるが、住民自身はどのように利用し、活用していったらよいのか、困惑の状態にあるというのが実情である。実際に、当初、考えていたような積極的な参加、活動は見られなかった。確かに、建設した施設等に住民を引き付けるだけの魅力や力がなかった、ということも原因の一つであろうが、住民自身の意識の持ち方に大きな要因があると考ええる。まず、住民のほとんどが高齢者であることから、活用意欲が乏しくなり、自然と協力がおっくうとなっているのが現実である。また、営林署の作業員として、また、西陣帯の手機内職従事による収入によって、現金収入面が安定してきたため、その施設に頼らなくても生活していけるという安堵感があることから、施設の利用、活動に対する意識の浸透が困難になっている。このような意識を改革することが、地域の回復、発展へ

の課題であると考ええる。そして、住民自身が、現在の生活がどうなっているのか、どうしようとしているのかを、もう一度考え直し、積極的に取組む姿勢を持つことが重要であると考ええる。また、現在の状態を自分の家の中だけで考えず、広い視野に立ち、現在のままの家や集落を維持していくということではなく、新しい村をどう作っていくのかという意識を持つことによって、世屋集落の崩壊を防ぎ、地域の回復・発展の第一歩を踏み出すことができるのではないかと私は考える。

結 論

現在我が国では、資本主義の急激な発展によって、都市での「過密」・農村での「過疎」の問題が大きな社会問題となっている。そのような中で、世屋地域は、これからどうなっていくのかという展望を、最後に、結論として述べていきたいと考える。

はじめに、世屋地域の展望についての行政側の見方は、「この先十年来ほどは、このままの状態でいくだろう。またＵターン現象を望むこともむずかしい。この地域が廃村にいたるか、入植者や住民によって復興していくかは、住民の意識によるだろう」というように消極的な話であった。そして、

世屋地域では、全国的な農業生産の比重低下と同様に、離農、

兼業化によって、主産業である農業収入の減少、地域と共に歩んできた伝統産業の没落、過疎対策事業への消極的な参加や活動などが存在している。

このような実態や意識の中では、廃村にいたることは目に見えている。これを防ぐためには、医療施設、公共施設等の充実によって、安心できる生活態勢をつくる。また、農業技術や農業経営の改革による主産業への意欲を回復する。施設や伝統産業を利用して観光村的に発展させる、などが重要となってくるだろうと考える。さらに、全住民に、このような住民意識を浸透させることはもちろんのこと、過疎対策事業としては、住民を引き付けるだけの要素や利用価値をもち、地域や住民の特質や意識を十分に配慮し、住民の意志を最大限に尊重し、全住民が積極的な参加や活動をすることができ、事業であることが必要である。

最後に、私の気持ちを述べて、この稿を終ることにする。現時点の世屋地域では、住民の前述のような意識の浸透を第一として、住民と地方行政が一体となった充実した過疎対策事業を行ない、地域の回復と発展の「村おこし」計画を、成功させてほしいと考えている。

参考文献

「世屋村郷土誌」

（京都府立総合資料館）

「藤織りの世界」

（京都府立丹後郷土資料館）

「伝説に生きる村・雪ぐれの里」中巻

（宮津市・図書館所蔵）